

## 第52回夏季県外史跡踏査

福島県（三春・郡山・会津若松）方面 一戦国時代から明治時代一

湘南高校定時制 丸山 理

### 日程

8月23日（金）：横浜駅西口一郡山東IC一三春町（歴史民俗博物館・紫雲寺・龍穩院）一郡山市（開成館・如寶寺）一宿泊地（磐梯熱海温泉）

8月24日（土）：宿泊地一安積疎水・上戸取水口一十六橋水門一会津藩校・日新館一会津大塚山古墳一会津若松市（旧滝沢本陣・会津武家屋敷・福島県立博物館・鶴ヶ城）一会津若松IC一横浜駅

地球規模の天候不順により、日本列島の今年の夏は地域によって40度を超える気温が記録されたり、水不足が心配されるかと思いきや、ゲリラ豪雨による河川の氾濫や土砂崩れで各地に被害が続出した。このような中で夏季踏査が実施された8月23日、24日の両日は、時折小雨が降ったものの概ね過ごしやすいコンディションに恵まれた。

最初に訪れた三春町は阿武隈山地の西裾に位置する小さな町で、現在では4月下旬に満開となる「滝桜」で有名だが、戦国時代には田村氏が支配し「田村四十八館」という館跡が点在する。江戸時代は秋田家の三春藩五万石の城下町であり、明治時代には河野広中を中心とする自由民権運動の盛んな地であった。三春藩士であった河野は戊辰戦争での三春無血開城に寄与したと言われ、その際に土佐藩をはじめとした官軍の若者たちと交流をもったことが後の民権運動での活躍につながったという。歴史民俗資料館の前には河野広中の銅像（写真①）と記念碑があり、資料館には自由民権記念館が併設されている。展示には、第36回夏季県外史跡踏査（1997年）の際に解説をしていただいた高橋哲夫氏のお写真と氏が寄付された自由民権運動関係の資料が多数出品されていた。今回は副館長兼主任調査員である平田禎文氏に、資料の解説と町内の同行案内をしていただいた。また、資料館の企画展として「三春と馬」が開催されていた。三春は近世から近代にかけて全国有数の馬の産地であったが、現在は途絶えてしまい、その名残が工芸品の三春駒であるという。三春小学校の校門はかつての三春藩講所の表門（寛政年間）で「明德堂」の扁額が掲げられている（写真②）。小雨の中を徒歩で移動。三春は山々に囲まれた瀟洒な町だが歴史の重みを感じさせる雰囲気であった。中世末に開かれたと言われる浄土宗の紫雲寺には自由民権運動家の墓が多く、広中の墓も東京の護国寺から改葬されている。三春藩主の菩提寺の一つである龍穩院は、「阿倍萬世植福道場」の額を掲げた医薬門をくぐり階段を上ると、宇治の黄檗宗萬福寺の影響を受けたといわれる独特の建築様式をもつ本堂が堂々と建っていた。戊辰戦争時には傷病兵の病院にされたり、明治時代には民権運動の演説会場にも利用されたという。

郡山市へ移動し、開成館敷地内に移設された旧安積開拓官舎にて講師の柳田和久氏（郡山市文化財センター）より安積疎水の歴史について解説を受けた（写真③）。開成館は、明治六年に区会所（郡役所の前身）として建築され、翌年、当時はまだ珍しかった三層楼・擬洋風の建物に改築され耳目を集めたという（写真④）。明治天皇の東北行幸の行在所としても使用された。内部には安積開拓の歴史関連資料が展示されている。柳田氏によれば、安積開拓は、通説で言われているような水利に恵まれない原野・荒蕪地を疎水工事によって新しく切り開いたということではなく、既に近世において諸河川に多くの堰を設けて水位を上げて行われていた台地の灌漑地を疎水幹線によって繋げる形で展開されたという。このことは、疎水工事が短期間で完成したことや疎水による開発新田に匹敵する面積の古田が存在することから証明できるという（「安積疎水と近世の水利について」『翻刻と研究 安積事業誌』安積開拓研究会編 歴史春秋社）。また、安積開拓は会津・二本松ほか久留米・松山・鳥取・岡山・米沢などの旧藩士族を移住させた士族授産事業でもあった。

夕刻、如寶寺にてキリシタン墓碑を拝観。凝灰岩造りで、解説板によると「元禄七庚戌年八月二日菩提」の銘文が確認されるものがあり、江戸時代この地域に多くのキリシタンがいたことを窺わせる

という。宿泊地の磐梯熱海温泉のホテルでは十分な温泉を堪能した。

二日目の朝、バスで猪苗代湖畔の北側を巡った。猪苗代湖は日本で4番目に大きな湖で海拔500mという高度にある。湖に注ぎ込む川は多いが、流れ出るのは西の会津盆地に向かう日橋川（阿賀野川水系）しかない。出口である戸の口には既に江戸時代に石積みの丸太橋があり、天明六年（1786）には石桁の十六橋が築かれ、後に戊辰戦争の激戦地となり会津藩の命運を決定した。明治十一年に内務省のお雇い技師、オランダ人のファン・ドールンが新たな十六橋水門を建設し猪苗代湖の水位を調節して、東岸から安積地域への取水を可能とした。翌年、山潟村（現上戸）に水門を設け、奥羽山脈の沼上峠に隧道を築いて五百川へ導水した。安積疎水の開削である。昨日の安積疎水にまつわる解説を思い出しながら、現在の土戸頭首工（取水口）と十六橋（写真⑤）を見学した。大正時代に水門と道路が分離され、昭和三年に鉄製桁となった十六橋を眼下に見つめてドールンの銅像が建っている。

戊辰戦争により焼失したものの、残された図面から総工費34億円をかけて会津若松市河東町に完全復元された藩校日新館は約1時間の自由行動とした。会津藩では藩祖保科正之以来、家臣の教育に力を入れてきた。最盛期の構内には孔子廟・大学校・東塾・西塾・文庫・洋学所・練兵場などが建ち並び、士分格から下級武士の子弟三千人が学んでいたという。長州藩の明倫館と会津の日新館にしか無かったという水練場（写真⑥）では甲冑をつけたままの水練が行われていたとも。2013年のNHK大河ドラマ「八重の桜」に日新館のシーンが登場しており、撮影に使われたのであろう。

移動中のバスの窓から会津大塚山古墳を見ながら飯盛山のふもとの旧滝沢本陣へ。大塚山古墳は東北地方でも最大級の前方後円墳で全長114m、昭和39年に発掘調査され、4世紀の割竹形木棺の痕跡の確認と三角縁神獣鏡（岡山県鶴山丸山古墳出土の鏡と同範）をはじめとする多くの副葬品が出土した。この結果、会津地域がヤマト王権の支配下となったのは7世紀の阿倍比羅夫の東北遠征以降であるとする通説が否定され、早くも4世紀前葉にこの地域の首長がヤマト王権と係わりをもっていたことが証明された。会津盆地には、会津大塚山古墳を含む前方後円墳3基から成る一箕古墳群・前方後方墳と方墳だけの雄国山古墳群・前方後円墳と前方後方墳が混在する宇内青津古墳群の三群があり、それぞれが4世紀を中心に継続的に造営されており、3系統の在り首長が同時に存在していたことも判った。ヤマト王権との具体的な係わりがどのようなものであったかの解明が期待される。旧滝沢本陣は会津歴代藩主が参勤交代などの際、旅支度を整えるための休息所としていた場所であり、戊辰戦争では藩主松平容保が出陣した所でもある。国の重要文化財に指定された建物（旧滝沢本陣横山家住宅）には多くの弾痕（写真⑦）や刀傷が生々しく残っていた。

松平家の墓所がある羽黒山の麓に、城代家老西郷頼母邸の復元屋敷や旧中畑陣屋（東北地方に残された数少ない代官所）などを移設して観光用につくられた会津武家屋敷では1時間ほどの自由見学と昼食をとった。ここには坂本龍馬を暗殺した張本人ではないかとされている佐々木只三郎の墓もある。

午後は福島県立博物館と鶴ヶ城を回った。博物館では主任学芸員の高橋充氏・古山智行氏から展示解説をいただいた。会津大塚山古墳の出土品をはじめ、福島県の原始・古代から近現代までの歴史を網羅した展示は見ごたえ十分であった。

南北朝時代に葦名氏によって築かれた東黒川館が、文禄元年（1592）蒲生氏郷により甲州流の縄張りを用いて整備され、七層の天守をもつ鶴ヶ城と名を改められた。その後、寛永十六年（1639）、加藤明成が天守を五層とした。戊辰戦争で砲弾に曝され傷だらけとなった天守は明治7年に取り壊されたが、昭和四〇年に復元された（写真⑧）。また、城内に復元された茶室「麟閣」は、秀吉の命により切腹した千利休の茶道が途絶えることを惜しんだ蒲生氏郷が利休の子、少庵を会津に匿った縁でつくられたものと伝える。快晴となり気温が上昇する中、鶴ヶ城内を古山氏に案内していただき、天守閣にも登って静かに佇む会津盆地を眺め、歴史に翻弄された会津の来し方を偲んだ。雄大な磐梯山も顔を見せてくれた。

帰路は高速道路の渋滞もなく21時には横浜駅西口へ着いた。



①河野広中像



②三春小学校校門



③柳田和久氏の解説



④開成館



⑤十六橋



⑥日新館 水練場



⑦旧滝沢本陣 弾痕



⑧鶴ヶ城天守